



「カリマネの壁」を乗り越えるために

「学校教育デザイン」を描き、それを実現する上で鍵となるのが、カリキュラム・マネジメント（以下、カリマネ）だ。しかし、実際にカリマネを推進しようとする、様々な課題が立ちはだかる。そのカリマネをテーマとしてVIEW21編集部が2019年3月に開催したカリキュラム・マネジメントについてのワークショップ（*）の参加者である高校教師6人と講師3人が19年12月に再会。VIEW21編集部の進行で、それぞれの学校におけるカリマネの現状とこれからについて話し合った。

それぞれの形で動き始めた「カリマネ」

2019年3月にカリキュラム・マネジメント（以下、カリマネ）をテーマとして行われたワークショップに参加してからおよそ9か月が経過し、各校のカリマネはどんな進捗状況か、また、どのような課題に直面しているのか、まずは高校教師がそれぞれの現状を語った。

ある教師は、「これまでも校内に授業改善や学校行事の見直しについて話し合う検討委員会は存在したが、それぞれが個別の動きになっていた。しかし、4月に校長へ『カリマネの推進チームをつくり、それを軸に教育活動の見直しを進めたい』と提案したところ、一気に学校全体の動きとしてまとまっていった」と状況を語った。このほかにも、「新学習指導要領を見据えた授業のあり方を、副校長や主幹教諭が中心になって考えるプロジェクトチームが立ち上がった」「分掌リーダーが集まり、学校のグランドデザインを作成した」「学校として育成を目指す資質・能力を言語化した」などの報告があり、多くの高校でカリマネが

着実に推進されていた。また、ある教師は、「本校では『カリマネ』というキーワードでの改革の機運が高まっているとは言えない。だが、少子化によって定員割れが起こっている学校も近隣にある中で、地域や保護者のニーズを把握して、どのような生徒を育てるのかを明確に打ち出し、存在感を示さなければいけないという危機感は、教師の中に確かに募ってきている」と、自校が置かれている環境変化を現場が感じ取っている様子を紹介した。

資質・能力を統合的に発揮する探究学習がカリマネの中核に

資質・能力ベースの学校教育目標の設定が進んだ高校で、教育活動の具体的な改善・見直しの軸になるのは、多くの場合が「総合的な探究の時間」だ。いくつかの高校から、NPOや地域の自治会、地元企業などで活動する外部人材に協力を仰ぎながら、地域の課題をテーマにした探究学習を充実させ、学校教育目標として設定した様々な資質・能力が発揮できる探究学習を展開した例が語られた。また、自校の教師が教科を

進行



株式会社ヘンッセコーポレーション
VIEW21編集部
統括責任者
柏木 崇 かしわぎ・たかし



前・岡山県立林野高校校長
三浦隆志 みうら・たかし

2019年3月まで岡山県立林野高校の校長を務めた。林野高校では、校長として着任した年度からカリキュラム・マネジメントを推進した。



静岡県立御殿場高校 教諭
美那川雄一 みながわ・ゆういち

教職歴15年。同校に赴任して3年目。2学年主任。担当は地理歴史・公民科(世界史)。



関西大学教育推進部 教授
森 朋子 もり・ともこ

専門は、学習研究、学習理論。島根大学教育開発センター長を経て、現職。共編著に『アクティブラーニング型授業としての反転授業』(ナカニシヤ出版)。

講師

*ワークショップの内容は、本誌2019年6月号・特集に掲載。

「学校教育デザイン」を描く今と未来



長崎県立佐世保西高校
教頭
舟越 裕
ふなこし・ひろし



福岡県立小倉商業高校
研修主任、指導教諭
松藤 史紹
まつふじ・ふみあき



徳島県立城北高校
教務課
鈴木 哲也
すずき・てつや



広島県立戸手高校
2学年主任、教育研究所
縄井 教昭
なわい・のりあき



岡山県立総社高校
校長
三谷 昌士
みたに・まさし



大阪府・
大阪市立都島第二工業高校
電気科長
坂本 高英
さかもと・たかひで

高校教師

超えて「社会貢献の経験を語る身近な実践者」としてのエピソードを生徒に語り、生徒とともにこれからの社会で求められる資質・能力について考えるなど、今年度から「総合的

な探究の時間」が教育活動の改善の中核的な役割を担ってきた事例も語られた。

そうした状況について、19年3月のワークショップに講師として参加した関西大学の森朋子教授は、「学力の3要素を踏まえた多様な資質・能力を統合的に発揮する場として、『総合的な探究の時間』を充実させ、さらに各教科の学習と連携させていくことで、生徒は様々な学びのチャンスを生かしながら、自分自身の強みやよさを確認することができるようになる」と評価した。

カリマネの動きに負担を感じる教師も……

「総合的な探究の時間」などでの探究学習の充実に価値を見いだす教師が増えている一方で、外部連携などの新しい取り組みに感じる負担もあつた。ある教師からは、「我々教師が生徒の力を低く見積もってしまい、あれこれと手をかけ過ぎることが、負担感の増大につながっている面もあるように思う」と、自らを振り返る声も聞かれた。また、「総合的な探究

の時間」だけでなく、教科学習においても資質・能力の育成を図るために、教師がチームをつくって授業互

観を始めたが、それが教師に負担をかけているという実感も打ち明けられた。

カリマネ進捗報告 福岡県立小倉商業高校「グランドデザイン」*



育成を目指す資質・能力に基づき、教育活動のグランドデザインを作成しました。どんな指導を行うべきかを教師間で話しやすくなりました。(松藤先生)

カリマネ進捗報告 徳島県立城北高校「目指す生徒像」



「高校で身につけたい力」について、生徒、教師、保護者が話し合い、目指す生徒像を言語化しました。今後はグランドデザインの作成に入っていきます。(鈴木先生)

*福岡県立小倉商業高校のグランドデザインの全体は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME」→教育情報→高校向け」でご覧ください。

各教師の授業目標を 学校教育目標と一致させる

カリマネの進捗状況は各校によって異なるからこそ、特に熱い議論が交わされたのが、「そもそもカリマネが推進されているとはどのような状態か」という点だ。「自校は、カリマネが推進されている状態にあるのかどうか分からない」と正直に思いを語る教師に、森教授は、「校内の教師がマイクロレベルの授業において学校の目標を共有できているかどうかポイント」と答えた。

「カリマネは、学校教育目標を達成するための手立てです。校内の先

生方で『本校の生徒には、この資質・

能力をしっかりと育もう』と、学校教育目標を共有した上で授業ができれば、生徒も自分の成長を実感できるようなんでしょ。逆に学校教育目標の共有があいまいだと、効果は分散します。生徒はいろいろな先生の授業を受けているからこそ、先生方がご自身の授業における目標を学校教育目標と合致させること、つまり、PDCAのPをそろえることが重要です。そして、マイクロレベルである学校教育目標に向けて生徒を伸ばすことができているか、データを基に評価し、改善のプロセスへとつなげる……それがカリマネが推進さ

カリマネ進捗報告 長崎県立佐世保西高校「指導改善プロジェクト」



1年目は教科主任、2年目は各教科の若手教師を中心に声をかけ、授業改善と「総合的な探究の時間」の充実を2大テーマにカリマネを進めていくプロジェクトチームをつくりました。(舟越先生)

れている状態です(図1)(森教授)

森教授の説明に、長崎県立佐世保西高校の舟越裕教頭が「学校教育目標から下ろされてくる各授業のPは、これからの社会での生き方につながるような、生徒の心に迫る言葉で伝えていきたい」と語るなど、参加した高校教師から共感の声が上がった。さらに、講師として参加した前・岡山県立林野高校校長の三浦隆志先生、静岡県立御殿場高校の美那川雄一先生が、学校全体としてのカリマネの機運の高まりの重要性を指摘した。

「カリマネにおいては、みんなで作っていかうというムーブメントの醸成が重要です。PDCAのPを丁寧

にそろえることで、授業や学校行事の精選が進めば、結果的に先生方の負担も軽減されます」(三浦先生)
「教師と生徒の思いが一致した時に、その教育は正しかったと言えるのが本来の姿なのではないでしょうか。だから、授業改善のためには、生徒自身に高校でどういう力を身につけたいのかを考えさせることも大切です。いずれ、生徒と教師がともにカリキュラムをつくる時代が来るはずだ」(美那川先生)



カリマネの動きを校内全体で共有するための具体的な手立てでも、高校教師から語られた。徳島県立城北高校の鈴木哲也先生は、「授業やテストで工夫している先生の取り組みを周知したり、保護者や卒業生が高校での学びが社会とどうつながっているのかを語り合う場を設け、出てきた意見を教師で共有したりしている」と、自身がかかわっている校内通信の活用を例示。また、広島県立戸手高校の縄井教昭先生は、「地域に対して何ができる学校なのかを、明確な言葉で語れるようになること

「学校教育デザイン」を描く今と未来

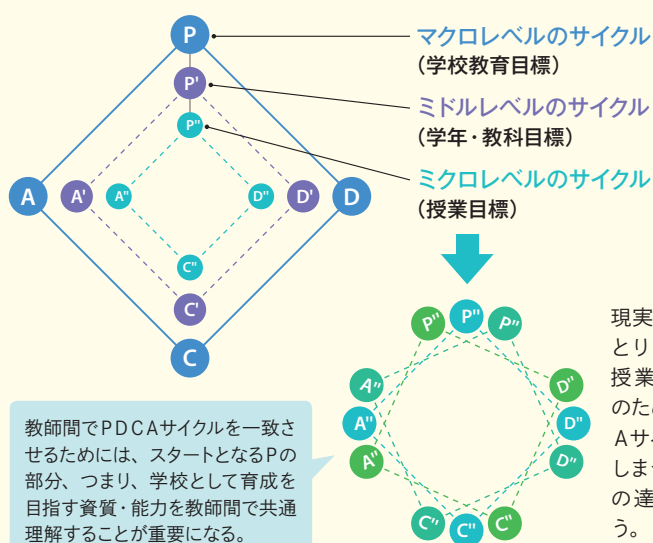
も大事だ」と、地域と連携した学校づくりの重要性も指摘した。

PDCAのAまで回る 評価項目(C)を

カリマネのPDCAサイクルにおける評価のあり方についても議論された。「国公立大学の合格者数が最大の目標となっている現状で、教師も保護者も、点数以外に生徒の成長を語れる材料を持っていない」という高校教師の問題提起に対して、三浦先生は、「だからこそ、生徒にどんな力が身についたのかを自由闊達に話す場を、まずは先生方の中につくってもらいたい」と、教師自身が変わっていくことを求め、それに対して、「生徒の資質・能力面の成長を保護者や地域に発信するなどして、学校が社会を変えていきたい」「若い先生の中には、資質・能力の育成を大切にして授業改善に臨む人も少なくない。若い教師の力と感性を信じたい」など、高校の力を信じる声が上がった。

岡山県立総社高校の三谷昌士校長の、「評価において大切なのは、客観データであるかどうかだけではな

図1 カリマネのPDCAサイクル



現実として、生徒一人ひとりが、複数の教師の授業を受けている。そのため、教師間のPDCAサイクルの軸がずれてしまうと、学校教育目標の達成は遠のいてしまう。

く、教育実践の見直しと改善に役立つものかどうかではないか」という指摘に、森教授が、「意図した力が生徒についたかどうかを多面的に測るのが評価であるが、それはPDCAのAが改善するものかどうか重要な」と語り、さらに、「1人の生徒の成長を教師同士でじっくり語

り合えるのは大学にはない高校のよさ。評価は、教師、生徒にとつてコミュニケーションであつてほしい」と、願いを語った。また、福岡県立小倉商業高校の松藤史紹先生からは、「暗記型の学習では対応できない、資質・能力を測る問題を定期考査で出すようにしたところ、3年生の保護者の方から、『進路が決まってひと安心していた子どもが、もつと深く学びた

いからと、これまで以上に一生懸命に勉強するようになった』といった声を聞くことがあつた。目の前の生徒を大きく変容させる力がカリマネにあることを実感した」と、実践例の紹介があつた。

講師と高校教師の対話の中で何度も言及されたのが、「生徒の声を聞

くことの重要性」だ。大阪市立都島第二工業高校の坂本高英先生は、「もともと学習に前向きな生徒だけでなく、高校入学後に意欲的に学び始める生徒もいる。それぞれの生徒に、何を学校に求めているのかを丁寧に聞くことが重要で、学校によっては個々の生徒に応じたきめ細かな教育などがカリマネの中に重要な要素として入ってくることもあるだろう」と、自校らしさを生かした学校づくりへの可能性に言及した。

ある高校教師からは、「カリマネがうまくいっていないとしたら、それは教師目線だけで授業や学校行事のあり方を考えているからではないかと気がついた。自校の生徒の立場で、『今後生きていく未来を考え、どんな教育が求められるのか』を、私たちはもつと語り合わなければいけない」と感想が述べられた。最後に、VIEW21編集部統括責任者の柏木崇が、「本日の議論を、各校でのさらなる対話のきっかけにしたい」と話し、再会の場は幕を閉じた。教師や生徒に加え、保護者など多様なステークホルダーが語り合えれば、これからの学校がより鮮明に見えてくるはずだ。